既に硬く張り詰めた肉棒を洗い清めるべく、ヌルヌルとした液体を擦り付けた。
（ちょっ……これ、マズいかも……）
少し前に付き合っていた女の子と別れてから、表向きは「春高に向けて集中したい」との名目で今はフリーの身である。つまりセックスの回数は減っている。かと謂って自慰の回数が増えるでもなく、要は溜っているのだ。
アイツを前に余裕の無い状態では居たくない。
そう思うと一回出しておく方が善いだろうと判断した。
「……く……ッ」
掌に力を込め扱き始めると、フワフワとした泡が立ち昇った。滑りが佳く自然と動きが速まる。
（やだな、もう……）
何故か泣きそうな気分になりながらも、
「あぁ……んんッ……」
ひとりきりだから遠慮なく声を発てる。こんな声をアイツに聞かれたくない――なんて殊勝なものではないけれども気が引けた。脚がガタガタと震え始め立っていられなくなり、バスタブの淵に腰を掛ける。一層激しく己が手を動かすと一気に頂点へと昇り詰め、心の底辺に澱む負の感情とともに精を迸出させた。

肌は火照り息は上がりっ放しで、自分で抜いた事実を知られたくないと思いはするけれど、後ろが疼いて仕方がない。
（どうせ「今日はよく準備してあるな」くらいにしか思われないんだから、別にいっか）
開き直ろうと腹を括って、もう一度カラダを洗いバスタオルで雑に拭く。
「お待たせ。とっととヤっちゃお」
隠そうともせずにバスタオルでガシガシと髪を拭きながらベッドサイドへ戻った。
見れば「ウシワカちゃん」はバスタオル一枚のままで寝息を立てている。
「……ウシワカちゃん、風邪引くよ」

sample

声を掛けても起きる気配が無い。その安らかな寝顔は「全日本ユース」だなどと才能や実力の差を思い知らされる憎々しく偉そうな肩書きも嘘の様に、同じ年頃の普通の男子に見えた。

（当たり前だけど、白鳥沢も練習ハードなんだろうな。それにコイツってば天才のくせに自分に厳しくて、絶対に手を抜かないから）

一応「どちらかが指定の時間迄に来なければお流れ」という取り決めになっている。

（無理して来なくてもいいのに）

追われる者もその立ち位置を守るべく大変な筈だ。そう考えると練習の疲れを圧してまで逢い引きを重ねている事実が、とてつもなく重いモノなのではないかと思えた。もう後戻り出来ない状況に自ら進んで嵌ってしまったような気がしてならない。

――考え過ぎだろう。

つまらない思索は放棄して使ったばかりのバスタオルを上半身に掛けてやり、全裸でバスルームに戻ってドライヤーで髪を乾かすことにする。

が、やはりこのまま本当に風邪を引かれ、自分の所為にでもされたら堪ったもんじゃないと思い直す。どうせコイツのことだから「自身の不摂生だ」としたり顔で云うに決まっている。コイツの反応がどうあれ不調の原因が俺だというのが厭(イヤ)なので生乾きの状態で切り上げ、広いベッドでスヤスヤと眠るソイツの上に跨がった。

「ヤるんだったら、さっさとヤる。そうでないなら帰るよ？ウシワカちゃん」

云いながら、これから自分の中に挿れられるであろう肉茎をバスタオルの上から力強く掴む。

「……ああ、及川、出たのか。サッパリしたか？」

何をされても慌てるどころか驚きもしない。少年らしさがまるで無い態度に嫌気が差す。だから敢えて返事をせずソイツのカラダから二枚のバスタオルを剥ぎ取ると、上体を屈め肉の塊を口に含んだ。「奉仕する」ワケではない「早くヤる」為だ。だから態と淫らな音を発て欲を導き出すようしゃぶった。

するとゴツゴツとした掌に頭の後から押さえ付け

と繰り返すことしか出来なかった。

こうして俺が抱えた正体不明の違和感は次第に増幅して行ったのだが、環境の変化の訪れで、ほんの僅かな間とはいえ俺の意識をそのことから逸らしてくれた。

それに「強豪」の称号は伊達じゃなく、特出した実力が無ければ篩い落とされる。そのおかげで体力どころか気力も使い果たし、遊びに興じている場合ではなかったのだ。

既に実力の備わった選手達に最高のトスを上げ、最高のスパイクが決まる。努力が結果として顕われる快さから、それまで以上にまたバレーを楽み始め、練習がキツいとか辛いとか全く思わなくなった。

スパイカーの能力を一〇〇パーセント引き出すための技術、人の心の機微を如何に捉えるか。そういったものを我武者らに吸収した。

そんな毎日が定着して来た頃のことだ。

と或る女の子から交際を申し込まれた。学校中の男子だけでなく他校生からも「可愛い」と評判のコだった。

余程のことが無ければ、誰しも他の誰かに好意を寄せられて悪い気はしないだろう。

しかし俺は「メンドくさいな」と感じた。

だのに、断り切れなかった。

その直後、久しぶりに岩ちゃんとセックスした後にこう切り出された。

「無理して続けることねえべ？お前、彼女出来たんだし」

「……え、何云ってるの？岩ちゃ……」

「おめーこそナニ寝呆けたコト云ってんだよ。彼女に失礼だろうが、ボゲ」

そこで漸く、或る時を界にMくんとも逢う機会が無くなり「後ろめたい」と思わなくなったからこそ、徐々に刺激が失われたのだと思い至った。

それこそが違和感の正体だと。

ウシワカちゃんだのトビオだのは都合のいい口実で、最初から俺はこういうダメな男だったのかもし

れないな、と自嘲した。
「だって、お前、あのコが「好き」だから付き合っているんだろ？」
マトモな感覚の持ち主ならそう捉えて当たり前なのだろう。俺は「彼女は彼女」「岩ちゃんは岩ちゃん」で、全くの別次元として扱っていた。
その両者、つまり岩ちゃんが云うところの「彼女に失礼」という現況に対する疾しさが、俺を満たしてくれるのではないかと期待していたのだ。
――期待とは裏切られるためにするモノなのかもしれない。その証拠に、
「……お前、あんま善さそうじゃねーじゃん、最近。俺に気を使う必要なんてねえぞ」
なんて言葉を投げかけられる始末だ。
「それに、俺も正直――キツい」
優しさに甘えてばかりだった俺はやっと、岩ちゃんこそが無理をしていたのだと知った。
その女の子とはどれくらい付き合ったのか忘れた。童貞を捨てた時のことも覚えていない。「可愛い」と評判だった容姿でさえ朧げで他の女の子達と区別がつかない。
「えーっ！及川くん彼女いるの？」
「ゴメンね。けどさあ……君が本気だったら奪ってくれてもいいよ」
そんな軽いノリの連続でしかなかったのだと思う。彼女らのバイタリティに任せ自己を主張せず「大事に」扱っていたのに、誰も長続きしなかった。
結果、初めに抱いた「メンドくさいな」に帰着し「バレーに集中したいから、今はゴメン」と断る口実を覚え活用した。既に始まっていたウシワカちゃんとの関係の維持を「彼女持ち」というステイタス以上に望んだからでもある。
大嫌いなアイツに組み敷かれる。
その「欲望」に抗えなかった。
決勝で敗れた後は、頭で否定しても心が否定出来ない快感で更に燃え上がった。
次こそ叩ます。そう誓って練習と逢瀬を重ねてい

sample